

悪魔の子
リ
ラ
ル



春風きらり



あれは、いつ頃からだろうか。

そう、あれは小学五年の頃の事。いい加減、自分の良い子ちゃん振りに嫌気がしていた頃。

ある日の昼休み、担任がいらないのを良い事に、クラスを仕切っていた怜奈が気の弱い由美をいじめていた。大勢で寄って集って。

「もう、本当に邪魔なんだよ。いつも何させてものろまだし」

「そうそう、あっち行けよ」

「そこにいられると目障りなんだよ」

怜奈たちは、口々に由美に暴言を吐いた。

何を言われても、由美はただ黙って俯いて立っていた。その無表情さに苛立つのか、由美を平手で打つ者がいる。足で蹴る者がいる。由美に対する暴力がどんどんエスカレートしていった。周囲のものは皆知らない振りをしている。由美を助け、次の怜奈たちのターゲットにはなりたくない。誰もがそう思っていた。

その誰もの中にいた私は、怜奈たちのエスカレートしていく暴力に合わせて、自分の苛立つていく感情を抑える事が出来なくなっていた。

怜奈たちを止めなければ由美がかわいそう。

そう思わなければいけないと思う自分にも何故か苛立っている。自分の見掛けだけの善、心の奥底にあるものは・・・。

苛立ちが自分という殻を突き破り、私の周囲に現れ始めている。そんな感覚がした。

突然、ガチャンとガラスの割れる音がして、わあっと怜奈たちが散った。そこに見えたのは、頭から血を流して立っている由美だった。後ろの窓ガラスが割れ、そのガラスの破片が由美たちに降り掛かってきたのだ。足元には、たくさんの破片が散らばっている。降り掛かってくるガラスの破片を避けようと、とっさに飛び退いた怜奈たちの中には、机にぶつかったりつまずいたりして倒れている者もいた。誰が、どうやってガラスを割ったのか？

それから、こんな事もあった。

下校時、いつもの様に怜奈が大勢率いて歩いてた。ちょうど、そこに私たちが遭遇してしまった。私たちに命令する怜奈。逆らって面倒な事になるのを避ける為、怜奈の指示に従う事にした。怜奈は、氣に入らないひとりごとをターゲットにあげ始める。いじめられている者とそれを笑いながらやっている者。その光景を見ると、私は体の中で何かがざわざわと動いている感覚がした。

なんて酷い事を。

本当にそう思っているのだろうか？

なんて手ぬるい事を。

本当はそう思っているのではないだろうか？

「あつ！」 怜奈が声をあげ、傍の池へと転落した。

続きは
完成版で
お楽しみ下さい。